

本を選ぶ

NO.410 2019年(令和1年)7月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

- <くろん・ぼわん>光原社のかご
- 『辰濃文庫』を訪ねて
- 「最終的に変えるべきはこの街の文化だ」
- 本づくりという気ままな一人旅
- 鳥の目 第75回

●●●●●くろん・ぼわん●●●●●

光原社のかご

一目惚れの出会いだった。ついに探し求めていた、素敵な“かご”にめぐり会えたのだ。

山ぶどうの蔓で編まれたそのかごは、少し小ぶり、なだらかな丸みを帯びている。ころん、とした形がなんともかわいらしい。それでいてしっかり、きっちりときれいな編み目で編まれていて、とても頑丈そうだ。持ちやすいようにという配慮だろうか、持ち手には、内側にかけて少し細くなるようにゆるいカーブがかかっている。

私はずっと、日常の買い物にも、着物で出かけるときにもちょうどいい、美しいかごバッグを探していた。だがサイズが大きかったり、私にはとても手がでないようなお値段だったりして、なかなかぴったりのかごには出会えないでいた。それが先日、岩手県盛岡市の民藝店「光原社」の棚にちょこん、と置かれたそのかごを目にした瞬間、「これだ！」とすっきり気に入ってしまったのだ。まさに一目惚れ。私にとっては勇気のいる大きな買い物だったが、こんな素敵なかごには、もう二度と出会えないから、などと自分に言い訳しつつ、思い切って購入した。

かご、うつわ、染物…昔から、使いやすくて美しい、ていねいな手仕事のものが好きだ。盛岡に

出かけたなら、生活に彩りを添えてくれる素敵な一品が並ぶ「光原社」には必ず、立ち寄るようにしている。

現在では南部鉄器や竹細工、漆器など、東北をはじめ全国各地の民藝品を取り扱う店だが、もとは出版社であった。「光原社」の名付け親は、岩手県出身の作家・宮澤賢治。創業者が賢治と同じ盛岡高等農林学校出身という縁から、賢治より童話の原稿を預かり、大正13(1924)年、この出版社から発刊されたのが、賢治生前唯一の童話集『注文の多い料理店』だ。後に南部鉄器と漆器の生産を行うようになると、柳宗悦ら民藝運動家たちとの交流を深めていき、民藝品を扱う店へと形態を変えていったという。

敷地内には中庭があり、『注文の多い料理店』の初版本や賢治直筆原稿などの資料を見ることができる「マヂェル館」や、クラシカルな喫茶店「可否館」なども建つ。なつかしいけれど、どことなく新しく、外国の香りもするようで、どこか知らぬ街へと迷い込んだような感覚を覚える。賢治の童話の世界観にも通じる不思議な静けさが漂う、大好きな場所だ。

かごを購入した際、店員さんが「このかごは、岩手県八幡平市のヤハタさんが編んだものですよ」と教えてくれた。丹念にかごを編む、つくり手の“ヤハタさん”の姿を思い描く。それでまた、かごをぐっと身近に感じる。私は「ありがとうございます、さきさまさん。長く大切に使います」と、そっとかごを撫でた。(ささきえり)

天声人語子・辰濃和男氏 『辰濃文庫』を訪ねて

神原 和子

「朝日新聞の1面コラム「天声人語」を約13年間執筆した辰濃和男さんの蔵書約1万冊を無料で貸し出す「辰濃文庫」が、埼玉県東松山市にオープンした」という記事が朝日新聞で紹介されたのは、辰濃氏が亡くなられてちょうど一年後の昨年末のこと。長きにわたって執筆を続けてこられた辰濃氏の蔵書を、氏と親交のあった一般の方が受け継いでしかも公開されていると知って興味が募った。

6月に入り少々蒸し暑いよく晴れた日、『辰濃文庫』を訪れた。この文庫は、埼玉県東松山市古凍『エコヴィレッジ東松山』内にある。

1 辰濃和男氏とは—

『辰濃文庫』の基となっている辰濃和男氏について、簡単に紹介しておきたいと思う。

辰濃和男氏は、1930（昭和5）年、東京生まれ。東京商科大学（現・一橋大）卒。1953年朝日新聞社に就職。浦和支局社会部を皮切りに、ニューヨーク特派員、支局長を経て、社会部次長、編集委員、論説委員、編集局顧問を歴任した。この間1975年から88年まで、深代惇郎氏の後任として『天声人語』を担当したのが辰濃氏である。

辰濃氏の著作は、国立国会図書館のデータベースでみると、雑誌論文を含めて87件登録されている。著名な作品は『文章の書き方』（岩波新書 1994年）、『四国遍路』（岩波新書 2001年）、『高尾山にトンネルは似合わない』（岩波ブックレット 2002年）、『風と遊び風に学ぶ』（朝日ソノラマ 1996年）等々。私は『私の好きな悪字』（岩波現代文庫 2002年）を読んできたが、諸物に対して造詣が深く、それでも平易な文章で分かりやすく実に面白かった。そんな辰濃氏の集めた蔵書

とは・・・。

2 辰濃文庫とは—

冒頭に記したように昨年朝日新聞でも紹介されたので、ご存知の方も多いと思うが、この文庫は辰濃和男氏の蔵書約1万冊を公開している。

2017年12月に亡くなられた辰濃氏の蔵書をどうするかということになった時、以前から付き合いのあった建築家の佐藤清氏を中心に、この蔵書を散逸させないようにこの「エコヴィレッジ東松山」に引き取ったいきさつがある。アクセスについては後述するが、「エコヴィレッジ東松山」は農家の建物群を活用し、教会・カフェ・講座・講演会等を開催している施設である。

「辰濃文庫」は敷地に入っすぐの蔵にある。蔵の入口には写真のように文庫の表札と太陽光パネルが置かれている。文庫の中はこの電気を利用しているので、太陽が照っている時間が利用可能である。

中に入ると真ん中にテーブルと椅子があり、閲覧席となっている。テーブルの一角は雑誌等がテーマに沿って置かれている。

壁面3面は新しい木製の書架になっていて、この書架も佐藤氏が手造りしたものである。蔵書は6つのテーマに分類されている。

- ①日本語を大切にすることばと表現
- ②平和…沖縄をライフワークにしていた
- ③緑と環境…緑に関する本が多い
- ④歩くこと…お遍路、平和とのつながり
- ⑤海外との接点…ニュージーランド、オーストラリア、プータン
- ⑥天声人語



左手の蔵が文庫建物。右手は「カフェ百水」の雰囲気ある建物。



手書きの文庫看板と太陽光パネルが並んだ蔵の入り口。

この分類も佐藤氏たちが感じたままに分類した
そうである。分類をしていてわかったのは、「政治・
経済」分野の本がなかったことだという。

こうした6分野のように図書館のNDCによら
ない分類も新鮮に感じられた。書架ごとにこのテー
マが貼ってあり、辰濃氏の蔵書が並べられている。
目についたのは、自然環境とお遍路さんに関する
蔵書である。お遍路さんに関して、辰濃氏は水上
勉氏との親交が深く関連した本が多数あるという。
また自然環境では、横浜国立大学名誉教授の宮脇
昭氏（植物学者・生態学者）とも交流があり、照
葉樹林関係などの蔵書も数多くある。他の蔵書群
でも感じたが、特に広く深く集め読まれていたこ
とがよくわかった。

さて、この「辰濃文庫」を開設するにあたって、
佐藤氏はじめ関係者の皆様の努力はいかばかり
だっただろう。佐藤氏は「書かれた本、読んで
いた本のジャンルがあまりに多岐に亘り、ただただ
驚きの連続だった」と朝日新聞で語っている。

伺った時もこの蔵に入って右手に階段があり、
2階には未整理の資料がたくさん置かれている状
況であった。佐藤氏は建築家としてご活躍中で、
なかなか手が回らない面もある様子だったが、辰
濃さんの思いを何とか残そうというお気持ちがい
しと伝わってきた。

3 利用するには—

辰濃文庫は前述したように「エコヴィレッジ東
松山」内にある。実をいうとアクセスはあまりよ
くない。私も車を運転しないので、どう行こうか
調べてみた。しかし以前走っていた市バスは現在
ないらしく、東松山駅—川越駅間のバスは日中数
本しかない。今は車で行くのがベストな状況であ
る。古凍の交差点で国道254号線を突っ切り、吉
見方面へ。途中看板が出ているので左折して突き
当りである。

おすすめは隣接する「カフェ百水」のランチ。
有機野菜をふんだんに使った体に優しい料理であ
る。ホットジンジャーもおいしかった。カフェの
営業日は日から水まで。辰濃文庫もそれに準ずる



文庫入り口には辰濃氏の書い
た色紙と写真が飾られている。
やわらかい筆跡と笑顔に人柄
がにじむ。



佐藤氏の手造りの棚に並ぶ蔵
書。辰濃氏の執筆の源泉とも言
えるさまざまな本は、タイトル
を眺めるだけでも興味深い。

開館だが、佐藤氏との交渉でそれ以外の日も可能
だそうである。

資料は、確実に返してくださることを前提に貸
出もしている。辰濃氏の思考の一端に触れる蔵書
の数々をその手に触れてみてほしい。

(かんばら かずこ)

《辰濃文庫》

住所：埼玉県東松山市古凍451-1

「エコヴィレッジ東松山」内

利用時間：10時30分～17時まで

連絡先：090-1033-6527

上記（佐藤清氏）宛に、必ずアポイント
をとってお出かけください。

*開設にあたり、佐藤氏は今まで縁のなかった東
松山市に辰濃文庫を置いてよいのか悩んだそうであ
る。けれども1985年7月21日の天声人語に、
オランダ東部の市、ナイメーヘンで毎年開催され
る「フォーデーズ・マーチ（4 days march）」につ
いて辰濃氏の一文があった。4日間歩く平和運動
としての話の締めくくりは、『楽しみながら歩けば、
風の色が見えてくる』。

東松山市も、オランダに次ぐ規模を誇るウォー
キングの祭典、「スリーデーマーチ運動」を40年
前から行って、この天声人語の一文が、大会
のキャッチフレーズとなり、市役所の正面入り口
に碑文として建てられているようだ。その時から
ご縁があったのである。

「最終的に変えるべきはこの街の文化だ」

—映画『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』鑑賞記—

小笠原 清春

この映画、その大半を占めるのは様々な会話の場面。電話や窓口でのスタッフと利用者とのやり取り、講演会やワークショップ、さらには図書館の様々なスタッフ会議などなど。映画の中の印象的な言葉、「図書館は本の置き場ではない。図書館は人だ」（オランダ人の女性建築家の言）を証明するような構成。言わば、図書館という「組織」の物語なのだが、これがめっぽう面白い。

ただし、上映時間は凡そ3時間半（休憩あり）となり、おまけに説明ナレーションなど一切無く、伏線も山場も無い映画なので、図書館に興味ある人以外には敷居が高いかも知れない。特に、親切な（説明過多な）だけじゃなくて感情の押し売りまでしてくれる日本映画に慣れた観客には、結構キツイ映画かも。

監督の話によれば、図書館に12週間滞在し、150時間ほどの撮影素材を1年間かけて編集したという。説明的ナレーションが無いとは言え、ピックアップした場面や構成からこの映画の主題は自ずと表れてくる。それは「ニューヨーク公共図書館は民主主義の実例だ」というものだ。さらに、監督の言ではあらかじめ意図したものではなかったそうだが、たまたま映画が完成した二日後にトランプが大統領になってしまったため、「ニューヨーク公共図書館は、多様性、機会均等、教育といったトランプが忌み嫌っているものすべてを象徴する存在で、それ自体、そして日常の活動によって、すでにトランプに対抗している」ことが如実に表れる映画になったと言う。

確かに、この図書館の日々を追うことで、ここは単に本がたくさんあるところなのではなく、人種や身分に関係なく、老若男女の全てに開かれた集いの場であり、議論を交わすことができる場であり、セーフティーネットでもあることが、そしてその運営には寛容と反差別が貫かれていることが、心から納得させられる映画となっている。

それにしても、スタッフ達のスピーチや説明が映画の1シーンみたいに決まっていて感心してしまう（ドキュメンタリー映画です）。そうかと思え

ば、会議では街うことなく真つ当な意見を戦わせているし。

黒人文化研究図書館の館長が、「人々を助けるために必要な面倒事をしよう」とスピーチをするだけでなく、ハーレムの小さな分館で、アフリカ系住民が抱える問題に耳を傾ける姿が素敵だった。

映画では結構な回数、幹部会議を映し出す。議題は、デジタル化、ホームレス、予算の獲得と振り分け等、日本の図書館でも抱える問題だが、「図書館の主演は人」という姿勢にブレはなく、図書館の果たすべき役割と市民のニーズについて真摯に議論する姿は尊敬に値する。

ホームレス問題を議論する中、館長は言う。「規則や専門機関を設けるのも大事だが、最終的に変えるべきはこの街の文化だ」。これって、経済的恩恵だけが先行しがちな“まちづくり”に、図書館がどう貢献するかの一つの答じゃないだろうか。

志の高さは恐らく全スタッフに浸透し、組織文化になっているのだろう。特に分館のスタッフたちの熱意は感動的。地域ニーズへの対応という、日本ではフワフワとしたキレイごとで終わってしまいかねないが、この映画ではもっと具体的な、切実なものとして取り組まれている。今さらながら、公共部門の仕事は、そこで働く人々の正義感に大きく支えられているんだなと感じ入った。

今後の日本でも、外国人労働者の増加による日本語学習の問題とか、ネット環境格差による情報格差の問題が顕在化してくると思われるが、それに対するためのアイデアと志のヒントが、この映画から多く発見できるものと思う。（おがさわら きよはる）

『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』

●監督：フレデリック・ワイズマン

2017年製作／アメリカ映画／3時間25分

*配給：ミモザフィルムズ、ムヴィオラ

付記：5月の上映開始時よりも全国的に上映館が激増し、一般映画ファンの間でも話題になっている。鑑賞後の「語る会」も盛んだと聞くと、絶好のPR機会なので、図書館（できれば複数共同）で様々なコラボ企画を展開されることに期待したい。

本づくりという気ままな一人旅

神谷 万喜子

萬書房を創業して丸5年が経ちました。これまでの刊行点数は15点です。創業当初は年5、6点の刊行をめざしていましたが、予定より大幅に少ない点数ということになります。あまり焦りはありません。現在の目標は「70歳くらいまで細々とでも出版社を続けること」です。ジャンルにこだわらず、自分の出したいものを出す、にはますますこだわり、無理して出さない、ことを肝に銘じています。

一人で出版社を始めて何が一番うれしいかというと、どんな突拍子もないテーマの本でも、自分さえよいと思えば出すことができる、という自由気ままさです。これって気ままな一人旅に似てる、と思ったら、よけいうれしくなりました。

10代、20代、世界中を気ままに旅することによってだけ憧れたか。その後、アジアの一部を旅しただけで日本に戻ってきてしまったことをどれだけ後悔したか。そして60代になった今、さまざまな責任を果たし、ようやく再び自由気ままな旅ができる状況になったのに、それほど旅心をくすぐられないのはなぜだろうと不思議でしたが、ようやく合点がきました。なるほど、本づくりという一人旅をしているからなんだな、と。

旅の醍醐味は思いもかけない出会いにあるのではないのでしょうか。同様に、本づくりも不思議な出会いに満ちています。これまで刊行した15点それぞれにさまざまな出会いがありましたが、とりわけ不思議な出会いのすえ生まれたのが、2015年夏に刊行した『尾崎翠の感覚世界』です。

この本は、芥川賞作家の加藤幸子さんが1990年に創樹社から刊行した同名の本の復刻版です。加藤さん唯一の評論で、それに尾崎翠の代表的な作品「第七官界彷徨」「歩行」「地下室アントンの一夜」を併録しました。

わたしが尾崎翠と出会ったのは、たしか大学3年か4年のとき、NHK-FMの「朗読の時間」という番組でした。寮を出て下宿で一人暮らしを始めたばかりのころ、春だったか、心地よい日差

しが部屋の中にふりそそいでいたのを覚えていません。部屋にテレビはなく、一人ステレオのラジオ放送を聴きながら本でも読んでいたのだろうと思います。音楽が終わってもつけっぱなしだったラジオから突然、男性の声流れてきました。

「よほど遠い過去のこと、秋から冬にかけての短い期間を、私は変な家族の一員としてすごした。そしてそのあひだに私はひとつの恋をしたやうである。……」

この冒頭を聴いたとたん、これまで経験したことのない不思議な感覚に襲われ、わたしはこの作品の虜になりました。この作品のタイトルが「第七官界彷徨」、作者の名前が「尾崎翠」です。その後、創樹社から全集が出ていることを知り購入、帯に花田清輝の「わたしのミュージズ」という文字が踊っていました。以来尾崎翠は、わたしにとって大事にとっておきたい宝物のような特別な作家になりました。

そして、萬書房を創業した2014年ごろ、尾崎翠論が刊行されたり、作品が映画化されるなどちょっとしたブームが起きていることを知ったのです。ようやくこれまで興味のなかった評論を読みたいと思いはじめ、まずは図書館で探しました。そのとき機械的に、検索結果で一番上に表示された本を借りたのですが、それが加藤幸子さんの『尾崎翠の感覚世界』でした。

こうしてなんの予備知識もなく手に取った加藤さんの尾崎翠論ですが、尾崎翠論として白眉であり、またも魅了されてしまいました。魅了された点はさまざまありますが、なんといっても加藤さんと尾崎翠の出会いの場面です。

「涼しい風のごときものが、体を走りぬけていった。すぐにその本と私のあいだに、とてつもなく強い磁石の力が働いているを感じた。……」

これを読んだとき、鮮やかに蘇ってきたのが、わたしと尾崎翠の出会いの瞬間でした。ぜひこの本を萬書房で復刊させていただきたいと強く願った瞬間でもあります。(かみや まきこ：萬書房)

鳥の目 75

—水鳥の巣と温暖化—

為貞 貞人

現在、世界の重大問題である地球温暖化は、水鳥などの野鳥にどんな影響を与えるのでしょうか。

気候変動枠組第21回締約国会議が2015年に採択したパリ協定は「産業革命前からの地球平均気温上昇を、2℃よりも十分低く抑えること」を目標に掲げ、さらに、気温上昇を1.5℃未満に抑える努力をすることを明記しています。しかし、各国がこの約束を果たしたとしても、2100年には3.5℃上昇するという予測もあります。気象庁が2019年6月14日更新したデータでは、2019年5月の世界の平均気温は1891年の統計開始以来5番目の高い値となり、長期的には100年あたり0.73℃の割合で上昇しています。

気温の上昇は様々な地域・分野で影響や脅威を与えることが指摘されていますが、自然環境や生態系の分野では生物多様性の損失、氷床消失による海面水位の上昇などが問題になっています。

日本でも各地で夏や冬の渡り鳥の減少が報告され、特にシギ・チドリなどの旅鳥の減少が指摘されています。日本の渡り鳥の多くが水鳥であり、その繁殖地はロシア極東の湾岸、河川、湖沼や湿原です。

アメリカスタンフォード大学とデューク大学の研究グループの発表（2007年）によると、21世紀末に気温が6℃上昇し、開発も進む最悪の場合を想定すると、世界の鳥類の2500種が絶滅し、2650種が絶滅の危機にさらされるとのことです。（中村司著『渡り鳥の世界』山梨日日新聞社／2012）

“^{うち}お家がだんだん高くなる”

最近、「東京都民の鳥」であるユリカモメの繁殖地の一つ北サハリンでの水辺の巣の写真を見て驚きました。つい、あの野口雨情の童謡『あの町この町』の一節にちなんで、「お家がだんだん 高くなる高くなる」と口ずさんでしまいました。

サハリン島の北部、オホーツク海側のチャイヴォ湾の岸辺の茂ったスゲなどの水草の上に朽ちた乾い

た灌木や草の茎を高く積み上げたまるで小山のような巣の上に、頭部が黒褐色の夏羽のユリカモメが座っています。『北サハリンの水辺の鳥』（ロシア科学アカデミー極東支部生物学・土壌科学研究所編2011年）所収の2006年6月17日撮影の写真です。

この北サハリンの水鳥の調査報告書によれば、ユリカモメは、水草の茂みを巣を水上に押し上げる支えとし、その上に高さ最大45cm、直径最大80cmの巣を構えます。春の解氷などによる増水に備えて巣を高く造っていると考えられますが、今後気候変動で予想される水位の上昇がどのように影響するか注目されます。

ユリカモメの繁殖地はサハリン北部のほかコリヤーク南部、カムチャツカ半島、シヤンタル諸島、アムール川低地などオホーツク海を囲む広範囲に及びます。気象庁の「気候変動観測レポート2017」によると、オホーツク海の家氷域面積は10年あたり6.9万km²（オホーツク海の全面積の4.4%相当）の割合で減少しています。

ハクチョウのお家は

寒帯や亜寒帯で繁殖するハクチョウはどうか。日本に飛来するオオハクチョウとコハクチョウのうち、オオハクチョウの繁殖地はシベリア北東部のタイガ（針葉樹林帯）で、アナドウイリ川やアムール川の流域、ハンカ湖周辺、北サハリン、カクチャツカ半島などですが、コハクチョウはより北の北極海沿岸のツンドラ地帯、極東では東シベリア海沿岸やチュコト半島のチュコト海沿岸のツンドラが繁殖地です。

このコハクチョウの巣を1987年7月に長谷川博さん（現・東邦大学名誉教授）が、チュコト半島のチャウン湾沿岸のツンドラの原野で観察しています。その記録（『渡り鳥地球に行く』岩波ジュニア新書／1990）によると、巣はまわりから草やコケをいっぱい引き込み、高さ50～60cm、直径およそ1.5mのマウンド状の台座になっています。初夏に雪が溶け

て洪水になったとき沈まないためにこうした高さに作っていたのですが、それから 32 年経た現在、どのような状態になっているのでしょうか。

ツンドラは北極周辺に広がる凍結した湿地帯で、最暖月の平均気温が 10 度未満で、短い夏の間には地表の氷層が融解し、コケ類や地衣類が生えます。それでも地表から約 30 cm より下は凍っており、永久凍土層になっています。いま、この永久凍土が温暖化により溶けだすことが心配されています。もしこの融解が進めば巣の高層化では済まず、コハクチョウの繁殖への大きな影響は避けられません。

タイガ地帯のオオハクチョウも水辺に近い地上にコハクチョウ同様に草の葉や茎を積んで大きな巣を

造りますが、雪解けの増水に対応したものです。温暖化は雪や氷の融解を早め拡大し、巣作りに大きな支障をもたらすおそれがあります。

また、一般に水辺で繁殖する鳥類は、その巣作りと産卵・子育てを水辺の草木の生育・繁茂時期に合わせ、スゲなどの草を巣やひなの保護に利用し、また水草やプランクトンなどに依存する小魚や水生昆虫、甲殻類を餌にしているので、気候変動による異常気象での湾岸、河川、湖沼の水位上昇や洪水、水質悪化、湿原の減少などが、多くの水鳥の繁殖や行動に大きな打撃を与えることが懸念されます。

(ためさだ さだと：さいたま市図書館友の会)